
ケルトの鳶 1

茜 新衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケルトの鳶 1

【Nコード】

N5945M

【作者名】

茜 新衛門

【あらすじ】

幼馴染の環と暁子。お互いに気になりながらも言葉を交わす機会が少なく大学生になった。大学での行事は多く学部が違う二人はすれ違ってばかりいる。準備万端整えて暁子へアプローチをしようと環が気負ったのも束の間、暁子はイギリスへ留学生として旅立ってしまう。

環と暁子

オッペツケペツポーブタのけつ！

カマキリ、かまあげてぴっぴっぴーで、

化けべそでべその・・・環のばかやろう～～～～！！

飛鳥駅を降りて周囲に誰も居ないのを確かめて、

東館暁子はぺちゃんこになったペットボトルを思い切り蹴飛ばした。
ペットボトルはガザッと前方に飛んで側溝にひっかかり止まる。

遠くに飛ばなかったペットボトルに環のひねた性格を思い出されて、
暁子はズカズカとペットボトルに近づき、浮いたペットボトルのは
じをねらって足を振り上げる。

つま先はうまくペットボトルを蹴り上げて、

あわれぺちゃんこのペットボトルは道路を飛び越えて駅の植え込み
の中に着地した。

暁子の気分は最悪である。

糧としている環の姿を大学の構内で今日三度も見られたというのに、
最後の三度目で明らかに・・・

明らかにである。

環に顔を背けられたのである。

昨日は軽く微笑んでくれたではないか。

その前は・・・

確か無視された・・・。

だが今日の環は完全に暁子と確認して顔を背けたのだ。

小学校、中学校、高校とクラスは違うが同じ学校だった環。大学までも同じになるとはなんとラッキーだと思っていた。すでに過去から環の周りにはたくさんの方の取り巻きがいて、暁子には近寄りがたい存在である。

大学での三千人もの新入生の中で沢尻環の姿を見つけたときは、天にも昇りたい気分の暁子だった。

英文学部と法学部という差を乗り越えてきっと会話を弾ませる日が来ると信じたあの入学式の日。

あれから半年が過ぎて、今なお顔を合わせて小学校の頃の思い出話をすることもなく、遠めに眺めるばかりで何も進展が無い。

暁子は新しく出来た友人から環の近況を逐一聞かされてはいる。が、取り巻きが多く暁子からは偶然を装う瞬間も学部が違っていると環の影すら見かけることも無い。

ポケットポケット玉姫伝、かえるのおけつでポップ、ポーーと、踊りながら帰宅する暁子である。

★人生において何が一番悲しいか・・・

それは努力した結果が得られないことである。

沢尻環は大学の食堂でたましい友人達の会話が流れていく中で、一人・・・物思いにふけた。

朝飯と昼食兼ねている食事にしては野菜が多く乗ったトレイにお箸でつついている耕平は

人生においてなにが大事か考え行き着いた結果が自分自身に磨きをかけることと気がついた。

「今度の新人戦はキャンパスで開催されるんだろう。先輩方が今度の土曜日は帰れないって言ってたけれどホントかいな？」

夜更かしはお肌の大敵なのである。今日はクラブに行かない日。

クラブに行かない日は、その日の運動量にあわせての食事を取ると耕平は決めている。

健康的な耕平とは真逆の貴明は痩せてがりがりの身体を

耕平のように脱げばマッスルボディーを目指してウェイトリフティング部に籍を置き

日夜黙々と少ない部員同士プロテインを飲みながら身体を作ろうと努力し

昼夜がっちり食べるように努力しているが

トレイに盛り上げた食事に手が伸びない。

「スポーツクラブの歓迎式。いいよな人数の多いクラブはたくさん新人が集まるんだろう？」

「聞いた聞いた、倶楽部室で寝泊りするってね。私しようこさんちに頼もうかな」

と可愛いのが売りの優奈。

レースのカチューシャが清純な雰囲気を漂わしている。

「寝泊りじゃない。懇談会。外国風に言えばクラブ紹介のパーティーって所だね」

と貴明。

目の前のしょうこのトレイは量り売りのサラダの皿と野菜とスープしか乗ってない。

から揚げやスパゲティの乗ったトレイは男子か体重管理をしていな

い女の子が多い。

入学式の時に茶髪でたてロール巻きにした派手派手女の一群が環の傍らではしゃぎまくる。

「いいわよー我が家ちよつとだけ広いから」と、しょうこさん。

とその隣でということ同じヘアースタイルで同じ微笑を口元で浮かべた京香。

これまたファッション雑誌から抜け出たような（但し男子だが）短い髪の毛を逆立てツンツンとした剣山にし、鍛えた胸元を無駄に出した服装の篤志。

「俺も便乗してもいいかな、しょうこさんち良い臭いだものな」と細身の顔にあどけなさが残っている。

「あらゝ、男子禁制なのよゝ」

きれいに上がったまつげをより披露して、しょうこはあごを引いて見せた。この上目ずかいはしょうこの得意技である。

ただし大学入試試験が終わって受験から解放されてからだからやった回数は少ない。

このくだらない話に口の端を少し上げて、相槌打っているかのよう

に環は見せかけているが、

その実はまったく聞いているいない。

今まで環の人生の中で大きな岐路は二度あった。

一度目は中学から高校への進学。二度目はもちろん大学への進路だ。中学二年生のとき一組の東館暁子の進路を調べてショックを受けた。彼女は成績がよく市内の有名進学校を希望していたのだ。

環はいえ陸上部の顧問の先生から、陸上に力を入れている私立高校へ誘われていて、

気持ちには新しい陸上部での活躍を夢見ていた。

中体連で3000メートルの県記録を塗り替え、その記録を三年生の夏にまた塗り替えた。

全国大会で入賞し、誰もが沢尻 環は有名私立高校に行くものだと思っていたが、

環は中二の終わりから塾に通い東館暁子と同じ進学高校を受験した。

環の周囲は驚いたが一番驚いたのは環である。

中学生浪人を覚悟して誰もが認める成績優秀者のみを受験した高校に見事受かり結果が実ったのだから・・

高校では早くも進路ごとに教室が分けられて、

東館暁子は特別進学クラス、沢尻 環は普通に進学クラスに入れられた。

最悪な事に特進コースの教室は別棟で、暁子と顔を合わせる機会は中学生の頃よりもっと減ってしまった。

ここで沢尻環はへこたれなかった、人生はまだ始まったばかりだと自分に言い聞かせ、

文化祭や体育祭などなるべく目立つ位置につくように心がけた。

勉強は駄目でもルックスとスタイルには自信がある。

かといって悪ふざけやバカのりの言葉使いはしない。

品行方正の正統派を目指して行動したつもりだが、

環が謙虚に振舞えば振る舞うほどなぜか腰パンの男子や超ミニの女子が環の周りには集まってくる。

弱小陸上部に入りインターハイで県記録を作り、またもや有名私立大学に行くものと思われていた環は、見事に皆の期待を裏切り国立大学法学部を受験したのである。

理由は東館暁子が行くから・・・

（安直に法学部は経済学部より上だと思ったからだ・・・）

大学の合格発表の日、受験番号の6桁の数字を見て、二人の新しいキャンパスライフを思い描いた。

忘れもしない大学の入学式の日、目を血柱させて入学者名簿で暁子を確認し人混みの中探したが、

どの女子も同じ紺色のスーツ姿で暁子を探し出す事はできなかったが大きな一歩を踏み出したとき、このとき、環は大いに燃えていた。

彼女の通学路を調べ、授業内容を確認するのに

文学部の知り合いにさりげなく聞きまくるのに三ヶ月を費やし。

やっと行動を起こそうとした時、夏休みになった・・・。

笑えない

「それチョー可愛い!!! お高いでしょう?」

巻き毛の揺れにあわせて垂れたイヤリングがスイングしてきらきら。ピンクダイヤの本物である。

「これね、パパの誕生日プレゼントよ」としよここ。

優奈が羨ましいのを露骨に顔に出してみせる。

「それなんとかって女優がやってたわ。ブランド品でしょう」

京香は話しに合わせるだけに徹する。

ピンクのガラス玉より薄く塗ったマニキアが気になる。

早く部屋に帰って花や蝶、ラインストーンを一杯乗せた替え爪を乗せておしゃれがしたい。

「見た見た、きつと同じTVよね私もいいなあ〜って見てたんだ」

と環の落ち込んだ気持ちは誰にも悟られること無く、環としよこの周りには似たような友達が集まり

その派手な女子学生に引き付けられる様に他の男子学生も近くに席を取り座りこみ、

昼食の傍らガールフレンドを求めてさりげなく話しに加わる。

毎度の事ながら環の周囲は華やいだ嬌声が続いている。

夏休みがあけて・・・9月末。

一限目から出席するという彼女（暁子）と同じ電車に乗り、

顔を合わせるためプラットホームから乗り換えの電車のドア前で、

鉢合わせした格好で軽く挨拶を環は交わした。

（早起きして大正解！幸先良いぞ）

直後に一駅前で乗り込んでいた知人に邪魔されなければ、後二言三言、言葉が交わせた。

（正面切って顔を合わせた！変わらないなあー。あきこはいつも目が活き活きしてる）

次の日用意した言葉を幾度も反芻して、ホームに立った彼女に声をかける。

（よっしゃー！）

残念な事に専門学校に通っている友人が間に入って、二人きりとは行かなかったがとにかく会話は弾んだ。

（専門学校の友人と）

ホームでの続きを電車内でも続けたかったが、その日は法学部の知人が多く彼女は遠慮して離れて行った。

（この次出遭ったら、競技会のことをさりげなく話す・・・）と離れた暁子に後ろ髪を引かれながら環の決意だけは固い。

ことごとくこんな調子で彼女とは挨拶程度の会話・・・挨拶も会話と入れられるならば、突っ込んだ話し（デートの約束とか）が進展しないが環は樂觀している。

電車内やプラットホーム、キャンパスでは友人知人が始終邪魔をするが

彼女の家の近辺では彼らが邪魔をする間が無い。

意外と近い距離に住んでいるのだから犬の散歩に託けて・・・次の土曜日に環は会いに行くつもりでいる。

九月も半ば、予定通り合宿の準備があるとクラブをサボって環は帰宅した。

そこへ待っていたかのように暁子の小学校からの幼馴染の中島るりから・・・

（環の幼馴染でもある）衝撃的な情報を環は聞いた。

中島るりは環の取り巻きのようにケバイ存在ではなかったが言動とアクションは大きく自宅前で環がバイクで降り立った時るりは犬の散歩で通りかかっていた。

玄関前で立ち話だ・・・内容は主に同級生達の進路でるりは口さがない近所のオバサンと同じく様々な情報を仕入れているらしく話はつきない。

いい加減話を終わらせたい環にとどめのるりの一言。

英文学部の東館暁子がイギリスに留学生として行くという。

その夜・・・環は眠れなかった・・・。

笑えない 2

一人物思いにふける環に、これまた周囲の騒音を無視して

優雅な風が吹いているように環と二人だけしかこの世にいないように京香は振舞い立ち上がる。

「環、4限目はどちらの教室？」

キラキラ光るピアスとブランド物のバッグが18歳とは思えない。

京香は高校生までは黒髪が長く美しく、とても今の状態は想像できない。

彼女の受験体制は親の庇護の元、万全を喫していた。

大学への推薦が決まり12月の推薦試験が終わって

合格通知が来て・・・年末から三ヶ月で京香のタガは全て外れた。

ファッション雑誌を買い、美容室でパーマをあて母親を連れてブランド品の洋服を買いあさる。

イタリアンやフレンチのレストランで食事をし、様々なお洒落講座に席を取った。

結果は想像を絶する17歳が・・・誕生した。

環の周囲は京香のように方向性を見失った友人がたくさん居る。

彼らは有名大学に入ることだけが目的で後の事は何も考えていない。

恐らく彼らの両親は大学に入ってしまったえば周囲の影響を受けてまた勉強に邁進するだろうという甘い夢を持って居る事だけは確かである。

「ホント環は真面目よね。教育課程までとるんだから・・・もっと大
学生生活を楽しんだらいいのに」

昨日したばかりのネイリストの繊細な仕事に満足げに京香は環を見

下ろす。

「ちゃんと楽しんでるよ、試験を受けるのは結構刺激的なんだよ、今度漢検の2級を受けるつもりなんだ」

そのどれも暁子がいる。どんな些細なチャンスも逃すつもりは無い。

環の答えに口を突き出して抗議をするがあえて京香は否定をしない。環は服のセンスもルックスもスタイルまでも彼女の及第点をクリアしている。

なおかつ京香のことを批判する事は一切無い。環のそばはかなり居心地がいいのである。

もう一人京香の上に行く派手な学生しようこが板についた微笑を口に浮かべている。

「では行きましょうか、環」

揺れるイヤリングを軽く髪の毛で隠して、ブランド物の皮のバックを肩にかけ、

あごを上げて沢尻環をうながしようこは、親に言われるまま教育課程を取ってはいるが環と同じ授業以外さぼり気味。

「ダッルイなあー、午後の授業は眠くてしょうがねえや」

貴明もと耕平も重たい腰を上げる。

四人とも他県からの受験者で金額の差は有るけれど優雅な一人暮らし。

それゆえに自己管理が大変なのだが・・・。

6限目が終わる頃には日が傾き環は陸上部に行く気も起きない。

これから電車を乗り継いで一時間、駅からバイクで10分足らず、たいてい帰りは乗り継ぎが上手くできずに帰りの帰宅時間は一時間半かかる。

もうじき国体に向けて合宿が始まる。環の記録は県ではまあまあだが全国的には上に百五十人以上のランナーが居る。

コンマ以下の細かい数字のせめぎ合いが、今後走り続ける限り環の前には記録の壁が立ちはだかる。

環は帰宅すると一番に自分で作った基礎練習を始める。

インナーマッスルを中心に鍛えびつしりと汗をかけた所で暗い道路に飛び出す、周辺に家が無くなる広い田んぼ道が環の練習場。

たまに犬の散歩をさせる人に会うが、それ以外は走る車も無く、二時間近く走る事が出来る。

ただし、田んぼ道はジャリがしかれ、雨が降った後水溜りがある。今日も自分で作ったメニューを黙々とこなす。そうしなければとても上位に食い込めない。

陸上部の練習をパスして帰宅した。玄関前でバイクを降り、沈んだ気分環は空を見上げる。

空には早くも月が昇り一番星が隣で輝いている。

バイクを車庫に入れ門扉を押す・取っ手を上げてないから開かない。

肩に力がいらない。

もう一度環は月を見上げた。

月とあの一番星のようにいつも暁子と一緒に居られたら・・・と環は思う。

暁子は授業が終わると教授を捕まえるため走らなければならなかった。

「先生！」

教授は足が早い。

405の教室を出てからエレベーターを使わず階段を駆け下りて一階の踊り場まで来ている。

「先生！正式な通知が来たんですが。内容がわからなくて。私は聴

講生という立場なんですか？それとも学生なんでしょうか意味不明なことが多くて・・・」

教授はアレだけの速さで駆け下りたのに息一つ乱れていない。

反対に暁子はすぐに、所在不明になる教授を捕まえるのに様々な場所に顔を出し、取り逃がし、やっと今追いかけて顔を見ることが出来たのだが、涼しげな教授と違い、暁子の背中も額も汗でびっしりと濡れていた。

「三年の木村君に書類のコピーを渡してくれ。少々意思疎通が出来てなくてね。いや君には関係ないことだがね。君は轟先生のゼミは取っているかね。大丈夫さ頑張りたまえ」

暁子の返事も待たずに細い長身をひるがえし教授は去っていった。

「さすがオックスフォード帰り、メチャ足が速いわ」

階段など生徒達はだるいので誰も使わない、なので、汗だくの顔を友人に見られずに済んだが誰も居ないのをいいことに思い切り肩を落としてため息も着けた。

別にイギリスに10年居て帰国しようと、足の速い遅いは関係が無いとは思うが、暁子等一年生はオックスフォード帰りイコール逃げ足が速い！となっている。

暁子はイギリス行き用の意を着実に揃えていたが、るりから環の写真を貰いそこねて少しブルーだ。

あの日挨拶をしようと5メートルほど離れた場所からグットタイミングで環と目が合った。

近くには彼のケバイ取り巻きが居たが気にはならない。

挨拶と近況でも話せれば御の字だと思っていたので留学の話題を考えていた。

環がその美しい横顔を右に振り、暁子を認め驚いた顔になり、嫌な物でも見たように顔を背けた。

なぜ？

環に嫌われる何があったのか？

暁子は必死で考えたが何も思い当たらない。

なぜなら暁子と環は小学校からの同級生だが一緒のクラスになったのは4年生の頃、の、一度だけ新任の先生が一年間担当して、5、6年生ではまたクラス替えがありそれ以後中学、高校と同じ学校へ通うが通学時間帯がまったく違いニアミスも無ければ学園祭で遠目から見ることも叶わなかった。

同じ大学、同じ通学電車で見かけるようになって、かなり環を意識するようになり、暁子にとって小さな幸せの日々である。

何しろ環はイケメン中のイケメンで、駅のホームで見かけた瞬間、この世に生きている者の中で最高にかっこよく澁んだ授業のことを全て忘れさせてくれる存在である。

下手なアイドルや若手俳優よりもずっと良い男だと暁子は思う。

キャンパスに行けば環はどの女性からも視線を集めていたし、男子学生ですら彼のかっこよさには脱帽しているように見えた。

教授連からも一目置かれているとも噂されるほどである。

その彼が顔なじみになった通学電車の中で、目線で挨拶を交わし、暁子と駅のホームでの立ち話もした。

遠目に見かけて必死で近寄り、たまに・・挨拶を交わせるようになった充実した日々が・・真っ青に晴れた空とは反対の灰色のねずみ色の日々に変わるとは。

なぜ？なぜ？

講義が終わりメモったノートを確認する。暁子の手が止まる。

環くんはなぜ私を無視したのか・・・気のせいだと他に理由があるはずだと思いたいが、交わした言葉が少なすぎて何が理由かわからない。

考えられる事は環は気分やさんでたまたま何かの都合で気分が悪かったとか・・・

もしくは暁子の後ろに嫌いな人間が居たとか・・・

どの考えも、どのシチュエーションも暁子を納得させる事ができなず、わけのわからないジレンマの渦にズッポリと浸かりきっている暁子である。

レジメを靴におさめ通路に出るが気分は晴れない。

苦悩に満ちた日々が環に始まる。

合宿に向かって身体の調子を整えなければならないからだ。

大学の陸上部の監督は体調を気遣ってくれるがこれといった指示は出さない、コーチも名ばかりで細かい指導は避けているように見える。

監督もコーチも当てにしていはいないので、環は無理を言わないが、走りこみの回数やスピードの配分など、データを取って分析してくれたら、もっとたくさん時間、環はトラックで走る事ができるだろう。

パソコンで調べる身体のケアと強化の策を練るのにも、暁子の事があって熱が入らなくなった。

合宿が終わってすぐに国体が始まる。このままでは何の手立ても無く・・・彼女と別れなければならない・・・

真っ暗な中、走りこんだ身体に秋風が吹く。門扉のきしむ音が心の中に響く。

大学の授業を放棄して参加した国体は華々しく始まる。大きな大会

に選手として選ばれて嬉しいがなぜか心の奥底に鉛の固まりが鎮座して環は競技を楽しめない。

環の国体での成績は順当だ。

（発熱や怪我というアクシデントが無い限り、おおまかな順序は変わらない。細かい上下変動はある）

環自身は自分の記録を伸ばすだけで満足だったが、近頃一部の若いスポーツ観戦者だけがひそかに噂し盛り上がっていた出来事があり、ちこちと噴出し始めている。

競技関係者からスポーツ誌の記者までもがイケメン探しに参戦し始めたのである。

球技は言うに及ばず、静かなスポーツ、ゴルフ界、陸上界にまで広がり、〇〇の救世主、とか、やたら〇〇プリンス等の愛称をつけるようになり、環の残った1500mの決勝は応援席が一段と騒がしかった。

環の結果は入賞には及ばなかったが9位の成績だ。

MBT (Masai Barefoot Technology)
を環なりに解釈して実践したのが良かったのだと思われる。

入賞を逃したものの環は携帯のフラッシュに囲まれて競技場を後にした。

陸上に関して騒々しい事が嫌いな環が眉間に皺も寄せずに、淡々とスポーツ誌の記者に答えている。

同行した競技者は噛み合わない一問一答を聞き、移動のバスの中で爆笑した。

笑われているが環の心の半分は暁子の留学について、あらぬ考えを巡らせているからまったく気にならない。

暁子がイギリスに飛び立った後の環の大学での生活は空しいばかりで、大学受験後のようにこや京香等となんら変わらない。

目標があつてこの大学に入り、その目標が少しずつ形を見せ始めた

ばかりだというのに・・・。

彼女の帰国を待って、はじめからスタートを切るには、捨てた物の
なんと多い事か・・・。

わけのわからない脱力感が、じわじわ這い上がり空しさが環の全身
を覆う。

なぜ？なぜ今になって？・・・

別れ

どんな事でも努力一つ……この言葉だけを繰り返し唱え現在の環が居る。

中学の進路指導の先生は環が志望校を告げると肩が震えていた。

高校の三者面談では教師と親とで話が盛り上がっていたが、担任への大学受験に必要な書類提出の時、言葉にあらわれない差別的なあの表情は・・屈辱以外の何ものでも無かった。

（人生を無駄にするの？担任の目はそう言っていた）

環だって尊敬する監督は居る。

有名大学のネーム入りで駅伝でも走ってみたい、が、駅伝は就職した後の企業でも出来るとあきらめている。

傍から見れば環の馬鹿げた執着心にしか見えない。が、環の暁子への想いは半端ではない。

十月の半ば朝夕が寒くなってきた。吐く息も少し白い。

国体は閉会式を終え、競技のために集められた選手たちは新幹線や飛行機の時間を気にしながら各自自分の職場や学校に戻る。

沢尻環はイライラしながら新幹線の到着を待っていた。

ホームでは環ファンがべったりとまとわりつき、ホームの乗客も何事かと女高生の視線の先を気にしている。

「お願いします！写メ一緒にとってください！」

女子高校生が黄色の声が響く。

ピンクの携帯電話にはどうやって付いているのかがわからないくらい可愛いぬいぐるみがひしめき合っている。

「これに祐美子ちゃんへって」

これまた隣から女子高生の友人が、小さなシールをいっぱい張った

青い縞々模様の手帳を広げて環の前に差し出す。

「次の試合は何時ですか？スケジュールを教えてください！」
横から変に曲がって新しい顔が覗き込む。

「友ちゃんあとあと・・・！」

サインペンを環の手に握らせようと手が伸びている。

「笑ってください！！押さないでよ！」

環がサインペンを持つとうと手を出し顔が下を向くと、
別の女子高生が下からのアングルを狙って座り込んで携帯を構えている。

「笑ってください！」

フラッシュに環は目を見開き一瞬何も見えなくなる。

「趣味はなんですか？ひこにゃん好き？」

カシャカシャと携帯のシャッターが切られる。

女子の集団は携帯の画面ばかりを見て、切符を持った婦人が近づいているのに気がつかない。

女子高校生が婦人を押しのけ、婦人は重いボストンバックを持ってよろめく。

「大丈夫ですか。どいてあげてください」

環は婦人の手を取り体勢を整えてあげ謝った。

「申し訳ありません。新幹線に乗られるんでしょう。皆さん！少し下がってください、お願いします！」

よろめいた婦人が環を見上げて苦笑している。

怒鳴りつけたいのに爽やかな環の顔に文句が出ない。

新幹線がホームに到着し、周辺の乗客が電車に入るのを見届けて環は新幹線に飛び乗った。

先に乗っていた乗客がポケットから携帯を出していじっている。
切った電源を復活させて、トイレのドアに背もたれかかってぼーっ
としている、環を盗み撮りする。

シャッターを切って座りなおした乗客に他の乗客が声をかける。

「芸能人？」

「さあ、知りません・・・が、なにかの話の種にでもしようと思ひましてね。画像が有ると話が盛り上がるでしょう」

答えを聞いた隣の乗客は納得してポケットの携帯を出して電源を入れた。

とたんに着メロの音楽がなって他の乗客から冷たい視線を浴び、さりげなく電源を切って寝たフリを決め込む。

バカ騒ぎは新幹線のドアが閉まった瞬間から環の頭から消え去った。クレアホール、ダーウィン・・・るりはいろいろ言ったから、キャンパス名が思い出せない。

暁子が行く地域はオックスフォード・・・ケンブリッジの名前も定かで無い。

飛行機の時間は・・・確か・・・ぎりぎり乗り継ぎさえ良ければ間に合う予定である。

新幹線から電車へ、また電車に乗り換えて・・・絶対に間に合うわけは無い・・・が一目、環は暁子の顔を見たい。

こんなことなら、たった一枚だけ環と暁子が偶然一緒に写った小六の時の写真を、

びりびりと破かなければ良かったと後悔した。

小六の修学旅行、ウイスキーボンボンを食べた暁子がやたらハシャイで、観光地で記念写真を撮っている同級生の間に割り込んでピースをしていた。

そのでばがめ状態の暁子と、真近で顔を突き合わせ肩を組んで取った写真は

環の机の上についてこの間まで飾られていた。

その写真以外に環が持っている暁子の写真は、卒業アルバムの中に

ある小さな集合写真だけである。

狭い新幹線の通路を乗客が洗面所を目指して行けば、トイレの横に立つ邪魔な環を睨みつけて乗客はトイレに入る。

胸で組んだ手も、足元を見つめた目も入ってきたときのまま。

発車して数時間、一度、車掌が通るかかり切符を見て座るように環に声をかけた。

不信にも思える環の態度は、物思いにふけていて害はないものと車掌は判断して、次の車両へ向かった。

それから1時間後車内アナウンスが車両に流れ、環は駅名を聞くと軽く奮え

荷物を肩にかけて降りる準備を整えた。もう腕時計は見えていない。

新幹線が止まり惰性で動く足が乗り換え電車の掲示板の前で止まり、表情の乏しくなった環の目が行く先を確認する。

流れる乗客の人混みに紛れて環はエスカレーターに乗った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945m/>

ケルトの鳶 1

2010年10月8日23時49分発行